

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

片倉もところによるサウディ・アラビア，ワーディ・
ファーティマ地域を対象とするフィールド調査写真
のアーカイブ登録について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 縄田, 浩志, 西尾, 哲夫, 片倉, 邦雄, 藤本, 悠子, 河田, 尚子, 古澤, 文, 渡邊, 三津子, 遠藤, 仁, 石山, 俊 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009860

片倉もそこによるサウディ・アラビア、 ワーディ・ファーティマ地域を対象とする フィールド調査写真のアーカイブ登録について

縄田浩志¹⁾²⁾・西尾哲夫³⁾・片倉邦雄²⁾・藤本悠子²⁾・河田尚子²⁾・
古澤 文²⁾・渡邊三津子²⁾⁴⁾・遠藤 仁¹⁾⁵⁾・石山 俊³⁾

1) 秋田大学, 2) 片倉もそこ記念沙漠文化財団, 3) 国立民族学博物館,

4) 奈良女子大学, 5) 人間文化研究機構

1 中東ムスリム社会を対象とした民族誌的フィールド調査資料 のアーカイブ登録の現状

中東ムスリム社会で実施されたフィールド調査研究とくにフィールド写真がアーカイブに登録され公開されている先例として数例が確認される。

第一は、ウェブ上に公開された最初のまとまった試みと考えられる英国ケント大学教授ポール・スターリング (Paul Stirling, 1920～1998) によるトルコの2村落に関する45年間に及ぶフィールド調査研究資料のアーカイブである (Zeitlyn 2000)。このデータベースの目的は、(1) 大きな社会変化を経験した時期のトルコ村落社会についてのデータを、将来世代の研究者が利用するためであり、(2) 一調査者によるフィールド調査研究のまとまった資料を使った教育のためであり、何といても、(3) 民族誌的な調査がどのように実施されて、どのようなデータが収集されたかについて、その深さと透明性を調査者本人が例示したかったからである (The Center for Social Anthropology and Computing, University of Kent at Canterbury 2020)。

このアーカイブでは、1949～1994年にかけて実施されたフィールド調査研究のデータと研究結果が保存公開されている。縦断的フィールド調査期間は、主に1949～1952年の集約的調査研究と1985～1986年の追跡調査という2つの期間からなるが、300世帯3,000人近くの村落住民の系譜図や社会関係、数十年を経たそれらの追跡、そして移民に関するデータが充実している。数百枚の写真、映像テープ、音声テープ、本人による28冊のタイプされた野帳に加えて、妻の野帳 (1949～1952年) と Emine Onaran Incirlioglu を主とする共同調査者の野帳 (1985～1993年) が含まれる。またトルコで出版・印刷された全ての研究資料、主著『Turkish Village』(Stirling 1965) の全文・図表・写真も公開されている。ただし、これらのすべてがオンラインで閲覧可能というわけではなく、申請があった資格を有する学者のみが利用可能である。その理由は、著作権、また被調査者の秘匿性を保つためである。野帳に記載された全ての個人名は匿名化され、資料における個人名は一貫して別名に置き換えられているが、野帳を相互参照することによって

個人をたどれるし、データベースとのマッチングも可能であるという。写真の注釈は、本人の早すぎる死によって、残念ながらあまり充実しないまま残された (The Center for Social Anthropology and Computing, University of Kent at Canterbury 2020; Zeitlyn 2000)。

第二は、トルコの遊牧民 Aydınlı を研究したドイツのケルン大学教授 Ulla C. Johansen のフィールド調査研究資料のアーカイブである。ウラ・C・ヨハンスン (Ulla C. Johansen, 1927～2021) は1957～1958年の調査を皮切りに、1964, 1970, 1982, 1989, 1995年と追跡調査を実施して遊牧社会の系譜データを体系的に収集する継続調査を行った。1997年に社会ネットワーク分析が専門の米国の文化人類学者ダグラス・R・ホワイト (Douglas R. White) から共同研究の提案をされたことをきっかけとして、時空間情報の注釈をつけたデジタルデータによる写真コレクションの整理と、野帳や日記を含むウェブサイトの構築に着手した。そこでは、存命の人物を除く複数世代の系譜図とその他の情報とのつながりが追えるようにすることで、歴史的なデータ群となることが目指された (Johansen and White 2002)。2014年に「ウラ・ヨハンスン・アナトリア民族学コレクション (Ulla Johansen Anatolian Ethnology Collection)」として現地トルコのコチ (Koç) 大学に資料が寄贈され、2015年からウェブサイトで公開されている (Johansen 2015)。写真キャプションの記述は充実しており、撮影年と撮影対象、緯度経度を含む撮影場所、そしてデータ形式が明記されている。また被写体と系譜データとの対照も可能となっている。ウェブ上で一般閲覧可能なデジタル・ファイルは、低い解像度でかつ透かしスタンプが入ったもので、そのままでは無断転用できないように制限がかかっている。検索可能な1,641シーンの写真群には、数多くの家族写真が含まれており、テントの中でくつろぐ夫婦や、テントの中で立ってこちらを向く3人姉妹の姿、室内で髪を覆うことなくくつろぐ都会の女性たちの姿、スカーフで髪を覆って木陰に立つ女性で「チャーミングな若い Yörök 女性」と題されたシーン等も含まれている。

アーカイブ・データ利用の実践的な経験の積み重ねの中から指摘されている主だった理論的また倫理的課題としては、守秘義務、匿名に関する配慮、データの著作権や所有権、知的財産権の侵害、コンテキストの喪失、データ共有基盤の欠如、といった点が挙げられているが (Corti and Thompson 2004)、そのほとんどを解決した上で、上記2つのアーカイブは運営されていると考えられ、極めて優れた民族誌的フィールド調査研究資料のアーカイブと評価できる。ただし、この2つのアーカイブであってさえ、アーカイブ構築に際して調査地を訪問して再調査を実施していないからなのか、被写体となった人物もしくはその家族や遺族から写真の利用許諾を得ているのか、肖像権につながる課題にどう対応したかについては、明確ではない。

本稿で扱う、片倉もとこフィールド調査資料は、調査時期 (1960～1970年代)、調査場所 (サウディ・アラビアのオアシス社会)、そして調査対象 (遊牧民集落における女性

の生活)といった側面において高い学術的価値が認められる民族誌的なフィールド調査資料であり(縄田・藤本他 2021), その中でも片倉もところフィールド調査写真の学術的かつ社会的価値は際立っているものの, データ利用の倫理的かつ社会的側面において多くの課題が存在している(縄田・片倉他 2021)。

片倉もところフィールド調査写真のアーカイブ登録になぜ踏み切ったのか, その背景と理由, そして登録後の課題について, 本稿では論じてみたい。

2 「片倉もところ中東コレクション」としての「地域研究画像デジタルライブラリ」登録へのプロセス

2.1 遺された片倉もところフィールド調査資料の全体像の把握と整理優先順位の策定

2.1.1 遺された資料の全体像を把握する

2020年3月時点で把握されている片倉もところフィールド調査資料の種類と点数は, 文書資料として野帳が4冊, メモ手帳が11冊, 図面資料として手書きの地図が11点, 標本資料として生活用具が243点, 音響資料としてマイクロカセットが200点, カセットテープが57点, 映像資料としてビデオテープが55点, 8mmフィルムが9点, 画像資料として写真が61,989点であった(縄田・藤本他 2021)。他にも, カード類, 日記, 手紙, 絵葉書, フロッピーディスク, パンフレット, チラシ等が確認されたが, フィールド調査資料としての学術機関への登録は現時点では見送っている。

文書資料, 図面資料と比べて, 劣化が危惧された音響資料, 映像資料のうち, 写真のデジタル化を最も優先し, 画像資料の埃・カビを除去しながら, 整理作業を進めた。ついで, 8mmフィルムのデジタル化に着手した。また並行して, 生活用具の整理を進めていった。

2.1.2 写真資料の「時空間的同定作業」の難しさ

写真整理そしてデジタル化の過程で, 保存や整理の状況が必ずしも良好ではないという認識にいたった。とくに写真をいつ, どこで撮影したのかといった基本情報を引き出すことが困難な点を課題として把握した。撮影順あるいはテーマ別等写真群によって整理・保管方法が異なること, 著作や講演等に利用するために収納ケースから抜き取られている場合があること, 著作等での記述はあるものの, 野帳等から撮影当時の状況と対応できる資料が少なく, 写真自体に附随するメモが多い写真と少ない写真の差も顕著であった。

その一方, 写真に対して様々な情報が付加された貴重なデータセット群が見つかった。オリジナルのフィルムから, コンタクトプリントと紙焼き写真を作成し, それらをメモ

やキーワードごとに封筒に分類するという方法をとっていることを把握し、データをカードに記載し、情報量が多く重要度が高いそれらをグループごとにまとめていることが明らかとなった。この方法は、梅棹忠夫による知的生産の技術（梅棹 1969）や川喜田二郎が開発したKJ法（川喜田 1967）等に触発されて実践していたフィールド調査資料のまとめ方と判断される（縄田他 印刷中；渡邊他 2019）。

つまり、資料に向きあいはじめてまず浮かびあがってきたのは、一群のフィールド調査資料がいつ、どこで集められたのかという基礎的情報をどう整備するかという点、つまり資料の「時空間的な同定作業」の難しさであった。現在であれば、撮影したデジタル写真に自動的に位置、年月日の情報を付加することもできるが、当時は別途情報をアナログで付加しなければならなかったことは言うまでもない。ただし課題は、時代が左右する技術的制約が生み出したものに必ずしも限定されるわけではなく、ある個人が収集したフィールド調査資料に他者が向き合う際に直面せざるをえない、その資料自体が内包している資料収集・保管・分析における個性ともよべる特徴であった。

2.1.3 写真資料のフォーマット・保管状況・撮影対象を吟味する

フィールド調査写真の原本には、35mmのネガティブ・フィルム、リバーサル・フィルム（ポジティブ・フィルム）の他に、120mmフィルム（ブローニー版）、紙焼き写真、コンタクトプリント等があり、2020年3月現在で61,989シーン分の存在が確認されている。その内訳は、ネガティブ・フィルム18,890シーン、リバーサル・フィルム30,410シーン、ブローニー版11シーン、紙焼き10,508シーン、コンタクトプリント2,170シーンである（縄田・藤本他 2021）。

写真が撮影された国や地域としては、サウディ・アラビア、アラブ首長国連邦、オマーン、カタール、バーレーン、イエメン、シリア、イラン、イラク、エジプト、アルジェリア、モロッコ、リビア等の中東、北アフリカ地域を中心として、インドやキューバ、イタリア、フランス、オーストラリア、カナダ他、多地域にわたる。撮影シーン数として最も多いのは、サウディ・アラビアを中心とした中東地域であった。

フィルムの埃やカビを可能な限り除去した後に、ネガティブ・フィルムとリバーサル・フィルムは3,600dpi カラーで、紙焼き写真はモノクロ、カラーにかかわらず1,200dpi カラーで専用機器を用いてスキャニングを行い、無圧縮の画像形式 TIFF と汎用性が高い JPEG の 2 つの形式で保存した。

2014年1月から開始された写真資料の整理とデジタル化は、当初の目的は、2015年3月に実施されたワーディ・ファータイマ地域訪問のための資料整理にあった（縄田・片倉他 2021）。あわよくば被写体本人や家族に会うことができ写真差し上げる機会も想定していた。したがって、様々なフォーマットの写真資料をあたりつつ、優先的に整理しようとしていたのはワーディ・ファータイマ地域で撮影されたもの、またサウディ・

アラビア、そして広くアラビア半島で撮影された写真であった。作業を通じて、現地調査の際に参考にできる写真を見つけ出し、デジタル化することによって、印刷して現地で見せたり、もしくはプレゼンテーションの際にそれらをパワーポイントファイルに張りつけて関係者に示すことを念頭において資料整理を始めたのである。ただし先に説明したように、その訪問が実現したことによって、片倉もところ調査資料の再分析と本格的なフィールド調査による再調査の道を選ぶこととなった。したがってフィールド調査の準備という観点からも、写真のデジタル化の優先順位は高かったのである。その後、科学研究費助成事業が採択され、そして「地域研究画像デジタルライブラリ（略称 DiPLAS）」に応募することへとつながっていった。このような経緯があったため、2016年9月にDiPLASに応募した時点で、すでに9,000シーン近くのデジタル化作業は終了しつつあったのである。

2.1.4 写真への整理番号付与とデータベース作成

片倉もところフィールド調査写真の整理作業と並行して、すべてのシーンに番号を付与して順次デジタル化作業を進めていった。具体的な整理方法は以下の通りである。

まず、写真の保存ケース（封筒や箱、ファイル）ごとに、番号を付与した。さらに、保存ケース内で写真がさらに小分けされている場合は、小分けのケースごとに枝番号を付与した。デジタル化とデータベース作成は、これらの保存ケースごとに行った。なお、写真のデジタル化に際しては、片倉もところ自身による保管・整理作業状況を崩さず、収納ケース、小分けケース内での並び順はそのままに、連番で写真番号を付与し、デジタル化した。ただし、保存ケース（封筒や箱、ファイル）は、自宅や研究スペースのさまざまな場所に収納されていたため、保存ケース番号の順番には、特に意味がない。

リバーサル・フィルムの内、マウントされたもののいくつかは片倉もところによりデュープ（コピー）された結果、画像の表裏がわからなくなっているものがあり、デジタル化した画像の中には左右反転しているものを確認した。そのため、連続した画像や類似画像を検証し、オリジナルと考えられるリバーサル・フィルム画像と被写体の服装や利き手、風景等を比較し、正しいと判断される表裏・左右を特定し、不適切なデジタル化画像については左右の向きを画像処理ソフトで反転させて、元の状態に戻した。

デジタル化したすべての写真に対し、収納ケース番号、収納ケースの上蓋や背表紙、マウントの余白や紙焼き写真の裏等に書かれたメモの情報も合わせて入力し、エクセルでデータベースを作成した。

2.1.5 「地域研究画像デジタルライブラリ」（略称 DiPLAS）登録のプロセス

新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』研究基盤リソース支援プログラム「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（課題番号

JP16H06281, 中核機関：国立民族学博物館)の支援による資料整理「地域研究画像デジタルライブラリ (略称 DiPLAS)」の初年度である2016 (平成28) 年度の公募に採択され、2017年1月から登録に向けた実際のやりとりが開始された。資料の保存状態の確認後、デジタル画像の所有権譲渡の手続きを行い、ワーディ・ファートイマ地域を中心とした約9,000シーンについて登録した。続く2017 (平成29) 年度に連続採択され、まだデジタル化が完了していなかったもののうち、サウディ・アラビアの他地域、またアラブ首長国連邦、イエメン、オマーン、バーレーン、ヨルダン等で撮影された約5,000シーンを対象としてデジタル化と登録を行った。続く2018 (平成30) 年度は前年度までに枚数の関係上申請しなかったデジタル化済画像やデジタル化をしていないブローニー版フィルム、またフィルム原本との対応が済んでいないがワーディ・ファートイマ地域で撮影されたと考えられる紙焼き写真を、補完的にデジタル化し登録した。

そのため、最終的にはネガティブ・フィルム5,316シーン、リバーサル・フィルム9,707シーン、ブローニー版4シーン、紙焼き写真401シーンの合計15,428点のデジタル・ファイルを「片倉もとこ中東コレクション (The Motoko Katakura Middle East Collection)」という名のもと国立民族学博物館が運営する「地域研究画像デジタルライブラリ」(略称 DiPLAS) において、デジタル写真の保存・活用を目的としてアーカイブ登録することになったのである。ID 番号は「KM」として、その後に5桁の番号をふった。

ちなみに、DiPLAS 登録以前に、片倉もとこ記念沙漠文化財団としてデジタル・ファイルを活用した例がある。2014～2015年にかけて7回にわたり、『季刊アラブ』の表紙を飾った。およそ半世紀前にサウディ・アラビアのワーディ・ファートイマ地域における「アラブ庶民」の生きいきとした様子をとらえた貴重な写真を活用したいという申し出があり、同財団として快諾したものである。公表と利用は問題ないだろうと総合的に判断したものであったが、その後の現地調査において写真利用許諾を取得する過程で、『季刊アラブ』154号の表紙を飾った、手遊びをする少女たちの一人 (現在は成人女性) から、個人が特定できないように顔の部分にぼかしを入れて欲しいという要望を受けた。そのため、DiPLAS には KM_5575として後に登録することになった写真は、邦文著書 (縄田編 2019: 139) においてはデジタル加工を施した上で、掲載することとした。

2.1.6 写真デジタルデータの所有権譲渡を決断した理由

「片倉もとこ中東コレクション」としてアーカイブ化された片倉もとこ調査写真の原本 (ネガティブ・フィルム、リバーサル・フィルム、120mmフィルム、紙焼き写真等) は、撮影者・片倉もこの夫 (遺族) である片倉邦雄が所有権を有し、片倉もとこ記念沙漠文化財団が管理を委託されている。一方、デジタル化データの所有権に関しては、国立民族学博物館に譲渡された。

なぜ、写真デジタルデータの所有権を国立民族学博物館に譲渡する決断をしたのか。

それは主に以下の理由がある。

最も大きな理由は、国立民族学博物館という国立の研究博物館が責任をもって半恒久的に民族誌的写真資料のデジタルデータを管理・活用するアーカイブの理念に賛同したからである。次の理由は、国立民族学博物館は片倉もところが所属し、名誉教授も授与されている組織であり、かつ片倉もところによる研究成果を最も的確に評価できる研究者が所属する組織だからである。また、データの管理・活用という点で遺族にかかる負担や、学術的観点と無関係に第三者に委ねられる可能性等を考えると、適切な運用を期待できる。一方、片倉もところ記念沙漠文化財団が存在するとはいえ、活動の持続性と組織としての恒久性を考慮すれば、間違いなく最適な選択であったと考える。以上の理由に加えて、デジタル写真のアーカイブ登録に限定されない多くの研究連携と活動計画が国立民族学博物館との間で複数存在していたからである。

以下では、国立民族学博物館との研究連携と活動成果の詳細について概説することにより、デジタル写真アーカイブの運用の実例を、片倉もところフィールド調査写真の立場から例示してみたい。

2.2 国立民族学博物館との多面的な研究連携

2.2.1 「現代中東地域研究」——研究拠点間の協力体制

片倉もところ記念沙漠文化財団の代表理事を2015年10月から務める縄田浩志の本属先は、秋田大学であり、我が国における中東研究の国際拠点ネットワーク構築を目的とした人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究」（2016～2021年）秋田大学拠点（拠点代表者：藤井光秋田大学大学院国際資源学研究科長）の研究代表者を務めている。自然資源を対象として「多元的資源観」の醸成による環境問題解決志向の学際的／超学際的研究を切り拓くことにより文理融合による地域研究の一層の躍進に努めている。

人間文化研究機構「現代中東地域研究」では、「地球規模の変動の中の中東の人間と文化——多元的価値共創社会の可能性」を共通テーマとし、西尾哲夫を拠点代表者とする国立民族学博物館拠点では「個人空間の再世界化」をテーマとした文化知識の資源化に焦点をあてた研究を推進しており、その点で片倉もところフィールド調査資料の研究とも密接に関連している。

片倉もところ西尾哲夫との交流も長く、西尾が大学院生時代に博物館の特別共同利用研究員として勤めた初日からの付き合いであった。片倉の日常の人となりや、上司としての組織に対する観察眼、また研究者としての鋭い考察に触れながら、学術的にも片倉が「ゆとろぎ」と翻訳したアラビア語の「ラーハ」について、エジプトのシナイ半島での調査から得たベドウィンの社会において異邦者を迎え入れる「ダヒール」制度と通じ合う概念として考察している（西尾 2019）。そのため、西尾哲夫は、密な協力体制を築

きながら関連プロジェクトと有機的な結合を図り、人類の文化遺産継承のための国際的かつ学際的共同研究を進めていく中で、片倉もとこフィールド調査資料の価値を最も的確に理解し、その活用を期待したのである。

2.2.2 共同研究「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」——物質文化の地域比較研究としての位置づけ

西尾哲夫を受入教員として採択された「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」（研究代表者：縄田浩志、研究期間：2016～2020年）では、アフロ・ユーラシア乾燥地全域を対象としつつ、とりわけサハラ沙漠、ナイル河岸、紅海沿岸、アラビア半島、イランに位置する5つの異なるオアシスにおける生活の持続と変容について、物質文化に焦点をあてて検証することにより、沙漠社会の移動戦略の解明を目指した。注目する物質文化は、(1)ラクダと船に関わるモノ（陸域と海域の連続性）、(2)飲料と食料に関わるモノ（食品保存と運搬性）、(3)衣装と住居に関わるモノ（熱帯と温帯・寒帯の対称性）である。これらの物質文化の検討をもとに、人類の進化と適応、社会組織の可変性と開放性、物質加工の技術と担い手の交流という3つの観点から沙漠社会の移動戦略に光をあてた。並行して、片倉もとこによるアラビア半島における現地調査資料（1968～2008）、小堀巖（地理学者）によるアルジェリア・サハラ沙漠における現地調査資料（1968～2010）といったおよそ半世紀前に記録・収集された学術資料を活用して、生活空間・物質文化・移動戦略の関係性とその変化について検証していった。

3年半の共同研究の研究成果は、主に(1)およそ半世紀前に記録・収集された民族誌的学術資料を活用して、衣食住を中心とした物質文化に関する文理協働（人文学、理学、工学、農学）の共同研究体制によって、アラビア半島ワーディ・ファーティマ地域における事例研究を格段に深化させたこと（縄田編 2019）、(2)その研究内容を企画展示「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」として迅速にアウトリーチしたこと、また、(3)生活空間・物質文化・移動戦略の関係性とその変化について異なるオアシスにおいて比較検証し、人類の進化と適応、社会組織の可変性と開放性、物質加工の技術と担い手の交流という3つの側面に注目しつつ、沙漠社会の適応戦略と移動戦略に関していくつかの新たな視点や論点を獲得したこと、である（縄田 2017; 2018a; 2020）。

例えば、乾燥熱帯の高温沙漠における衣服を、特に女性の下半身肌着の形態に注目して、人類の進化と適応の側面から分析した。暑い沙漠では、頭や体を広く覆える形の衣装が一般的である。地面からの照り返しによる体への熱の流入を防ぐ必要から適している。女性は男性よりも汗をかきにくく、かいた汗がながれおちる割合が男性よりも小さい。したがって、同じ量の汗をかいても女性は男性よりも気化熱によって熱をすてるの

に使える汗の割合が多く、その結果、効率よく体温をさげることができる。また、暑くなると女性は太ももの皮下の血流を増やして、汗をかかなくても、伝導や輻射で熱をすてることができる。そのため、女性の肌着は太ももの部分がゆったりとしていて、この部分からの放熱がしやすくできていたのである（縄田編 2019: 50-53）。

ワーディ・ファーティマ・オアシスにおいても、男性と女性の衣服を比較すると、白を基調とした衣服は男性、黒や色柄を基調とした衣服は女性という点での差は明確であった。こうした男女差は、エジプト、スーダン、アルジェリア等の他のオアシスの事例と共通しており、放牧や耕作を中心として炎天下における作業に長時間従事する男性にとって、可視光線を反射する白地で頭部や頸部を覆うことが必須だからである。ただし色合い以外の点では、男性用の衣服の形態や種類は概して変わっていないのに対して、女性用の衣服は外着・内着・肌着、頭・髪覆い、飾面ともに変化した点が多かった（縄田編 2019: 68-73）。

女性用の伝統的な晴れ着マハーリードの生地 of 裁ち方と縫製を分析すると、一枚布を効率よく使い、裾はリサイクルしつつ、裏打ちしたキルトで棘から女性の足を守っていたことがわかったが、現在は利用する人は少なくなった。一方、黒い外着アバーヤが主流となったのは1980年代から90年代はじめであることを写真との対応により把握した。外着はカラフルから黒へ、アバーヤの形は四角から袖・装飾がつく動きやすいものへと変化してきた（縄田編 2019: 74-91）。このように半世紀に及ぶ飾面と外着の種類や形態



写真1 祭りの日に着飾った女性
撮影：片倉もところ，1970-1971年，シャームーヤ村，KM_0586



図1 サウディ・アラビアのワーディ・ファーティマ・オアシスにおける男女の衣装の半世紀の変化：(a) 女性の外着，内着，肌着の変化；(b) 男女の衣装の形態・種類・名称の変化；(c) 女性用装身具の変化。A：頭飾り，B：飾面，C：首飾り，D：腕輪，E：指輪，F：腰飾り，G：足輪，H：足指輪，I：護符をかたどった首飾り（H0100442），J：ヒラールを含む幾何学模様の装飾がほどこされた首飾り（H0100443）。図a～cのスケッチは郡司みさお，遠藤仁作成（縄田編 2019: 73; 79; 103）。(出典：縄田 2020)

を丹念に追うと「黒のベールで顔まで覆い隠されている女性」という一面的なイメージはあてはまらず、色柄から黒が基調へと絶えず変化を伴ってきたことがわかった（縄田編 2019: 11）。

女性にまつわる物質文化として次に注目されるのは、金製・銀製の装身具の社会的意義である（写真1）。既婚女性が身につける装身具は、芸術的な価値や歴史的・文化的意味に留まらず、危機的な状況に遭遇した時に市場で現金化して当座をしのぐための家族の財産にするといった意義があったと考えられる。その代表格は、価値の安定性が高い貴金属の金であった。金という財産を身につけるものは、女性に限定され、かつ他者が気づきにくい肌着のボタンにしたり歯に埋め込んだりする等して財産保護を第一としていた（片倉 1979）。資源の稀少性・変動性・偏在性が高い自然環境に成立した沙漠社会は、安定した生活様式を模索してきた。そのためには開放性をもった商業ネットワークに加わり、持ち運びが容易な貴金属という財産に依存しつつ、自然環境と社会環境の変化に柔軟に対応してきたと考えられる。

現在では、他者の目に触れる外側に華やかな金製の首飾り、腕輪、指輪をつけるのが好まれるようになった。一方、銀製の装身具は重いこともあり、ほとんど利用されなくなる等、女性による財産保護の意味合いは薄れてきた（縄田編 2019: 114-115）。ただし、イスラームの護符や三日月ヒラルをかたどったデザインは継承されており、現在の価格にして30万円ほどもする金製のネックレスが販売されている（図1）。このように物質文化に「生活様式と資源利用の世代間ギャップ」が認められた（縄田 2020）。

2.2.3 「中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース」

—— 標本資料のデータベース化、国際シンポジウム開催、新情報に基づく研究進展

上記の共同研究会メンバーまた片倉もところ記念沙漠文化財団メンバーが連携して、国立民族学博物館「中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース」における片倉もところ調査資料の432件の標本資料のデータベース化に協力した。

国内外の研究機関や大学、博物館および現地社会と連携しながら国立民族学博物館および連携機関が所蔵する多様な文化資源について国際共同研究を推進し、その成果を個々の文化資源に関する基礎情報に加味して記録化するとともに、フォーラム型情報ミュージアム（多言語によるフォーラム機能をもつマルチメディア対応のデジタルアーカイブズ）から発信することを目的としている（Kishigami 2016）。

片倉もところがアラビア半島において収集した資料コレクションとしては、国立民族学博物館在籍中に収集して登録・保管されている国立民族学博物館所蔵分189件、また随時収集した個人所蔵分が片倉もところ記念沙漠文化財団で委託管理されている243件、計432件に関する調査ならびにデータベース化を実施した。上記共同研究ならびに、片倉

もそこ記念沙漠文化財団が関係を築いたサウディ・アラビアの現地研究機関、さらには現地社会の人々との国際的な協業によって、すでにデータベース化されている基本情報について、必要に応じて標本資料を実際に熟覧しながら、精査する。これをもとにデータを整理し、日本語、アラビア語（現地方言形も含む）、英語による情報を付加していく。同時にDiPLASによる画像データベースの中に収集品や物質文化に関連して撮影された画像情報を整理して、最終的にはデータベースにリンクするかたちでフォーラム型情報データベースの高次化を図ることが計画された。

このようにして、片倉もとこが収集した資料コレクションにかかるデータベースについては、現地社会の人々との協業によって情報を付加し、収集時期の画像データベースもリンクさせることで、地域コミュニティの社会変化を探る物質文化に関する資料として活用することができる。さらなる展開として、フォーラム型情報データベースをもとにした企画展示を現地サウディ・アラビアで巡回させることにより、国立民族学博物館所蔵資料に現地社会での文化伝承の機能をもたせることも念頭において行われた。

2017年12月にはアラビア半島の文化遺産保護に関する研究者・研究機関および一般参加者を対象とした、国際シンポジウム「アラビア半島の文化遺産保護の現状と展開——サウディ・アラビアを中心として」を「現代中東地域研究」と国立民族学博物館「フォ



写真2 「フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト」のワークショップにて、標本資料写真をもとに新たな情報を得る
撮影：縄田浩志，2017年12月19日，国立民族学博物館

ーラム型情報ミュージアム」プロジェクト，同「地域研究画像デジタルライブラリ（略称 DiPLAS）」，また片倉もところ沙漠文化財団との共催で横浜情報文化センターにて開催した。サウディ・アラビアのキング・ファイサルセンターとキング・アブドゥルアジーズ世界文化センターより学芸員を招へいし議論した。また両者と共にサウディ・アラビアの関連収藏品にかかる情報収集のために「フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト」のワークショップを国立民族学博物館にて開催した（写真2）。

特筆すべき研究成果は，現地の関連研究者を招いての熟覧と情報付加を行う過程で明らかとなった銀製指輪の構造と用途であった。日本で標本資料として登録されている筒状の装飾がついた特徴的な銀製指輪（標本番号 H0100424）は，サウディ・アラビアで1980年代初頭に収集されたということはわかっていたが，それ以上の情報はなく，収集者である片倉もところの著作物にも，同資料に対する具体的な言及はないことを確認していた。そこでサウディ・アラビアから招いた研究者を交えて行った標本資料の写真をもとにした情報収集の際に，同資料はおそらくアラビア半島西部に存在するものではないか，という情報を得た。そしてその後，ワーディ・ファールティマでフィールド調査（2018年4～5月）を行った際に，上記の銀製指輪と類似する資料をワーディ・ファールティマ社会開発センターの収藏品の中に発見し，さらに大きな筒状の座が音を鳴らすことがわ



写真3 標本資料の銀製指輪（H0100424）と同タイプの指輪をワーディ・ファールティマ社会開発センターに収集・保管されている物質文化コレクションに確認する
撮影：縄田浩志，2018年5月2日，アル＝ジュムーム市

かった（写真3）。筒状の座は中空で、内部に何らかの固形物が入れられており、そのために振ると音を鳴らす構造となっている。また本標本は、片倉もところがおそらくワーディ・ファティマで収集したものであろうと、現地の複数人から意見を得た。さらに聞き取りにより、音を奏でる理由は女性が自分の存在を知らせ、男女間の不用意な摩擦を避ける社会的意味を持っていることが明らかとなったのである（遠藤他 印刷中；遠藤・郡司 2019；遠藤／メレー 2019）。

この標本資料、銀製指輪と音を奏でる様子を撮影した音声付きの画像は、企画展示の冒頭を飾るメインの展示品の一つとなった。

2.2.4 企画展示「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年」開催

国立民族学博物館、横浜ユーラシア文化館、片倉もところ記念沙漠文化財団が共催した、企画展示「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」（2019年6月6日～9月10日に大阪の国立民族学博物館、また同年10月5日～12月22日に横浜ユーラシア文化館で開催）における中心的展示内容として、研究成果をアウトリーチした（縄田 2019a, 2019c; Nawata 2019）。またその内容は企画展示と同タイトルの邦文著書としてまとめ、日本語・英語・アラビア語での標本資料リストをつけた（縄田編 2019）。

片倉もところが撮影したモノクロ写真に、手作業をする女性の姿をとらえた一枚がある（図2）。女性が顔を覆う飾面、体にまとう衣装、床に置かれた生活用具、そして手作業



図2 女性の日常生活の写真（撮影：片倉もところ、1968-1970年、ダフ・サイニー村、KM_2397）に写り込んだモノを同定する（左上：飾面、右上：クッション（ひじかけ兼まくら）、左下：女性用頭・髪覆い、右下：ナツメヤシ製のござ）（出典：縄田 2019c）

によりつくりあげているモノ等その日の彼女をとりまく日常風景が写し撮られている。よく見ると、飾面であれば鼻の部分にコインが配置されていること、頭や髪を覆う一枚布は、少し透過性があり、所どころに花柄が付いていること、床に置かれたのはひじかけにも枕にもなるクッションであること、ナツメヤシの葉を帯状に編み込んで敷物をつくっていること等を、さらに読み取ることができる（縄田 2019b）。

本企画展示・出版物では、民族誌的フィールド調査写真とそれに写り込んだモノが何であるかを同定し、物質文化としての詳細な特徴を研究した。半世紀前の暮らしを記録した貴重な写真である反面、白黒ゆえにわかりにくいこともある被写体のディーテールも、ある時期、ある場所に生きた、ある女性の等身大の日常生活の一断面として蘇らせた。物質文化という切り口から生活世界の全体像と一人ひとりの人物像を照らし出していく。その研究プロセスを、来場者・読者と共有することを目指した。

企画展示会場では、写真パネル（60×90cm が12シーン、90×150cm が2シーン）として片倉もところ撮影写真でDiPLAS登録済みの14シーン（13シーンは人物写真、1シーンは景観写真）に説明キャプションをつけて展示した。また解説パネルにおいても、51シーンの写真を用いたが、片倉もところ撮影写真でDiPLAS登録済みのシーンは42シーンあり、そのうち人物写真は35シーン、景観写真は7シーンであった。私たち調査グループの再調査時に撮影した写真8シーンも用いた。またDiPLASに未登録の片倉もところ撮影写真を解説パネルで1シーン用いた。

出版物においては、片倉もところ撮影写真でDiPLAS登録済みの80シーン（65シーンは人物写真、15シーンは景観写真）、未登録の2シーンをを用いた。

「片倉もところ中東コレクション」としてデジタル画像の登録を行った15,428点のうち、4,000点以上に達する画像には人物が写し込まれていた。その利用、また公開／非公開について肖像権に関する個別事情を考慮した検討を積み重ねた。その結果、半世紀前に写真の被写体であった村人もしくはその家族と新たな信頼関係を結ぶことにより、現地語アラビア語での書面への署名により写真一枚ごとの写真利用許諾を取得する方法を採用した。200点弱の人物写真一枚ごとに合意を書面で取りつけて出版物や展示会場で公開したことは、管見では世界初の先駆的事例と考えられる。展示パネルまた展示関連出版物として書籍において、デジタル加工技術を最大限活かして体の一部にぼかしを入れる等して、個人／家族の意思／遺志に沿うかたちで、女性を被写体とする写真を計33点掲載できた反面、本国サウディ・アラビア国内での公開合意に至ったのは18点と約半数に限定された（縄田他 2019）。

出版物においては、片倉もところが50年前からサウディ・アラビアにおいて継続的に撮影した写真を利用している。一般に写真を公開して利用する場合には、撮影者の権利と並んで被写体となっている人物の権利を考慮しなければいけない。

さまざまな立場の関係者とともに多角的な検討を行った結果、企画展示のチラシやポ



写真4 ある女性の家族写真を公開用に画像処理を施したもの
 撮影：片倉もところ、1968-1970年、ブシュール村、KM_2238（出典：縄田・遠藤他 2019: 39）

スター／展示会場／出版物での利用，日本／サウディ・アラビアでの公開・出版において異なった条件がしめされた。使用範囲および公開時の画像利用条件（顔をぼかす，手をぼかす等画像処理の必要性の有無）について，最終的には，写真1点ごとに被写体本人もしくはその家族や関係者に利用許諾のサインをもらった。

写真4の場合，左側の飾面姿は民族誌写真として貴重である。これを公開利用するためには，すでに本人は亡くなっているため，現在成人となった娘（中央の赤ん坊）から承諾を得た。右側の女性（赤ん坊の姉）も亡くなっているが，存命中の家族からは承諾を得ることが残念ながらできなかった。このような写真を利用する場合には，人物特定ができないように顔の部分をぼかす処理をしている。

それでもこの写真は，日本における展示会場での公開と，日本語での出版における掲載についてのみ，関係者により利用が許可された。その一方，企画展示のチラシやポスター，ウェブを使った宣伝には用いないでほしいという強い要望があった。加えてサウディ・アラビア国内における展示会場での公開や出版における掲載は許可されなかった。

以上のような理由から，掲載された写真の二次利用が厳禁であることについて，あらためて理解をいただきたい旨を，展示パネルまた書籍において明示，明記した（縄田他 2019）。

3 片倉もところによるワーディ・ファーティマ地域を対象とする フィールド調査写真のアーカイブ登録の意義と運営上の課題

3.1 国立民族学博物館「地域研究画像デジタルライブラリ」(略称DiPLAS) 登録の意義

科学研究費助成事業の採択により、「地域研究画像デジタルライブラリ」(略称DiPLAS)へ申請する資格を得てデジタル画像登録につながったことこそが、片倉もところフィールド調査資料のなかでも特に写真資料の活用が主要な研究活動となった大きな理由である。ただし、DiPLASへの採択により写真資料のデジタル化を開始したわけではなく、遺された片倉もところフィールド調査資料の全体像を把握して、整理優先順位を定めて、写真のデジタル化を開始したのは、片倉もところ記念沙漠文化財団の事業の一環としてであった。2016年度に科学研究費助成事業が採択され、そしてDiPLASに応募することになった2016年9月の申請時点で、すでに9,000シーン近くのデジタル化は終了しつつあった。

2016～2018年にかけて登録することにより、最終的にはネガティブ・フィルム5,316シーン、リバーサル・フィルム9,707シーン、ブローニー版4シーン、紙焼き写真401シーンの合計15,428点のデジタル・ファイルを「片倉もところ中東コレクション」という名のもと国立民族学博物館が運営するDiPLASにおいて、デジタル写真の保存・活用を目的としてアーカイブ化した。

写真デジタルデータの所有権を国立民族学博物館に譲渡する決断をした主な理由はすでに述べたとおり以下の5つにまとめられる。(1) 国立民族学博物館という国立の研究博物館が責任をもって半恒久的に民族誌的写真資料のデジタルデータを管理・活用するアーカイブの理念に賛同したから、(2) 国立民族学博物館は片倉もところが所属し、名誉教授も授与されている組織であり、かつ片倉もところによる研究成果を最も的確に評価できる研究者が所属する組織だから、(3) データの管理・活用という点で、最新の世界的な動向を踏まえて適切な運用を期待できるから、(4) 片倉もところ記念沙漠文化財団と比較した場合、活動の持続性と組織としての恒久性において優れているから、(5) デジタル写真のアーカイブ登録に限定されない多くの研究連携と活動計画が国立民族学博物館との間で複数存在していたからである。

研究環境について、より踏み込んだ記述をするとすれば、国立民族学博物館において片倉もところの当時の同僚研究者として、片倉もところの研究内容に対する敬意と深い理解がある吉田憲司、西尾哲夫、岸上伸啓、野林厚志、またDiPLAS責任者の飯田卓といった国立民族学博物館所属の現役研究者による全面的なサポートがあったからこそである。具体的な活動としては、人間文化研究機構「現代中東地域研究」に基づく研究拠点間の協力体制、「中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース」による標本資料のデータベース化の協働、共同研究「物質文化から見るアフ

ロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」を通じての地域比較研究としての深化、そして何にもまして企画展示「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年」の開催計画・準備と同時並行的にこれら諸々のプロジェクトを有機的にリンクさせながらデジタル写真の活用を推進することができた。

私たち調査グループとほとんど同時期に、アーカイブ写真を再利用して実施した民族誌的なフィールド調査に基づいて展示活動に結びつけた興味深い事例がある (Sbriccoli 2016)。イタリアのシエナ大学の社会人類学者 Tommaso Sbriccoli は、著作『Caste and Kinship in Central India』(Mayer 1960) で知られるロンドン大学オリेंट・アフリカ研究所 (SOAS) の英国の人類学者エイドリアン・C・メイヤー (Adrian C. Mayer) が私的に整理して所有していたフィールド調査写真を引き継いで、1950年代に撮影された写真を手がかりに2012～2014年にインドの Jamgod 村に赴き、写真家の Daniela Neri と共に同地で再調査を実施した。Mayer 自身は1950年代の最初のフィールド調査以来、Jamgod 村を訪れる度に親戚や祖先の写真を被写体の家族にプレゼントしており、2007年には村の村落集会にまとめてプリント写真を寄贈もしていたという。

私たち調査グループと最も異なり、正直羨ましい点は、調査に赴く前に次世代の研究者 Sbriccoli は最初の研究者 Mayer と共に写真のデジタル化を進め、その過程で Mayer 自身から論文、野帳また写真に記録された人物や場所について、様々な情報を受け取ることができたという点である。現地ではラップトップで Mayer が撮影した写真を見せながら、個人もしくは集団インタビューを行った。Jamgod 村で Mayer が撮影したほとんどの写真のデジタルバージョンが一つにまとまって Sbriccoli のラップトップにあることから、一種のデジタル・メタ・アーカイブが、次世代の調査者自身を通じて多くの村人に利用可能となり、彼らの記憶を呼び起こすきっかけとなっただけでなく、過去と現在をつなげる語りの場を生み出したという。「現在における過去」と名づけられた彼らのプロジェクト成果は、2015年にロンドンのブルネイ・ギャラリーにおいて「田舎世界の将来」という大きなテーマ展示群の一角をなした。展示における写真表象の仕方は、昔の白黒写真を手に持った現在の人々の写真をカラーで示す方法で統一しながら、変化した暮らしについての語りを解説するという展示法であった。例えば、父が写し込まれた写真を60年後に手に持った娘の写真では、他の人が写っている部分は切り取って父の姿のみ残して、現在では家族の祭壇に飾られて、先祖崇拜の儀礼の際に利用されていることが解説された。「過去と現在、個人と家族、写真家と人類学者、年長の人類学者と年少の人類学者、観察者と被観察者、といった間に、複雑な相互作用が生まれた。デジタル・メタ・アーカイブの存在によって生まれ出た議論と記憶と語りが、多くの異なった瞬間と分裂した現在を一緒にしようと補完しあいながら発展していくようなプロジェクト」(Sbriccoli 2016: 306) であったと総括されている。

この事例は、私たち調査グループの調査研究と展示活動によるアウトプットのプロセ

スと重なり合う共通の問題意識を見出すことができ、DiPLAS の活用の一方向としても示唆的な論点を含んでいる。ただ片倉もところフィールド調査写真に向き合う私たちは、過去のフィールド調査写真を出版や展示を通じて再利用する際に、どのようにして現地社会の同意を取りつけることができるか、ということが目前の一番の課題であったが、その点はインドの Jamgod 村のケースでは問題にはならなかったようである。

3.2 再調査を通じての写真利用許諾取得という新たな方法論の模索

企画展示「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」における中心的展示内容として、また『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』邦文著書として、DiPLAS に登録されたデジタル写真は、研究成果の一環としてはじめて公開された。企画展示会場では、写真パネルとして片倉もところ撮影写真 DiPLAS 登録済みの14シーンに説明キャプションをつけて展示した。また写真つき解説パネルにおいても、DiPLAS 登録済みの42シーン、そのうち人物写真35シーン、景観写真7シーンを活用した。出版物においては、DiPLAS 登録済みの片倉もところ撮影写真80シーンを用いた。

これら展示と出版を通じた研究成果のアウトリーチは、ワーディ・ファーティマ地域を対象とする片倉もところフィールド調査写真の学術的価値と社会的価値の両方を最大限に活かして成し遂げられたものであった。

調査対象社会にとっての学術的調査報告の受けとめ方には、これからも最大限、留意しなければならないと考える。ワーディ・ファーティマ地域を訪問した調査グループは、アラビア語版『*Ahal al-Wādī*』（Katakura 1996）がワーディ・ファーティマ地域の学校で教材として今でも利用されており、その価値が高く評価されていることを複数の関係者から感謝された。それでも、著作の一部の内容、また何枚かの女性が写り込んでいる写真の一部は、黒塗りをされていた。人物を黒く塗った理由は、個人を特定できてしまう可能性があったから、という説明をうけた。

文献資料によれば、サウディ・アラビアで公立の男子校・女子校において1926年以来使用されてきた教科書には、女性のイラストは掲載されることはあっても女性を被写体とする写真は全く掲載されてこなかったようである。ところが、最近になって外国語英語の教科書に女性の写真が含まれるものが見られるようになったものの、使用された写真は医療分野で働く女性で、目とおでこを除いてベールで被われているという（Sulaimani 2017）。教育現場の標準がこのようなものであるとすれば、『*Ahal al-Wādī*』が教育現場で用いられる時には、女性の写真が黒塗りにされていたことは納得がいく。

ワーディ・ファーティマ地域を対象とする片倉もところフィールド調査写真を展示・出版物で活用できたのは、再調査を通じて写真利用許諾取得という新たな方法を採用したからであった。半世紀前に写真の被写体であった村人もしくはその家族と新たな信頼関

係を結ぶことにより、現地語アラビア語での書面への署名により写真一枚ごとの写真利用許諾を取得する方法を採用した。200点弱の人物写真一枚ごとに合意を書面で取りつけて展示・出版物で公開したことは、管見では世界初の先駆的事例と考えられる。

写真の著作権と肖像権のあらましや具体的な契約書のマニュアルが検討されているが（日本写真家協会 2020）、民族誌的な現地調査写真の取り扱いの議論は未だ尽くされていない。写真利用許諾取得という方法に至ったのは、これもまたサウディ・アラビア現地研究者の示唆と協力があってこそであったが、その詳細については稿をあらためて記述し議論してみたい。また、写真一枚ごとまた個人／故人もしくはその家族の意思／遺志に差異がある理由は、調査を継続し今後焦点をあてるべき重要な研究テーマと考える。

3.3 デジタル写真の一般公開に向けた課題

偶像崇拜を認めないイスラームは、唯一神アッラーの彫像・画像の作成を禁止した（小田 2002）。預言者ムハンマドを図像化することは例外的で、写真という技術が発達してからも不特定多数の人に自身の姿をさらすことを嫌い、特に女性の場合は厳しい（Speelman 2010）。現代イスラーム社会では一般的に成人女性の写真を家族以外に公開することは認められない、といえる。とりわけ人物特定が可能な画像に関しては注意が必要である。

片倉もそこは次のように述べていた。「女性を写真撮影することは社会的タブーであったため、詳細な映像資料として記録することはあまりできなかった。優雅な衣装を身にまったり、皆で生きいきと暮らす様子、とりわけ結婚式のために着飾っている女性たちの写真を撮りたいという強い誘惑にさいなまれた時があったが、その際は、現地のアーダート（‘ādat: 慣習や習慣を意味するアラビア語）に従うこととした。細心の注意を払って築き上げた信頼関係を失うことがあっては元も子もなかったからである。本書に掲載されている女性の写真は、彼女たちから完全な信頼を得たものである」（Katakura 1977: xv）。「彼女たちのわたしへの信頼と好感のほうを大事にすべきだということは、はっきりしていた。『あなたたちの思い出に、わたしだけがみるのだから』といって撮らしてもらった写真は、約束を守って人にはみせていない」（片倉 1984: 15）。

しかしおよそ半世紀がたった現在、新たに村の人々との関係が深まり、被写体となった人物が特定され、本人もしくはその関係者の許可を得ることができれば、公開に踏み切ることができる判断し、展示・出版物に写真を掲載した。調査資料の扱いに詳しい現地の専門家にも協力をあおぎ、研究資料なかでもデジタル画像の共有化を進めている過程である（縄田 2018b）。

先に紹介した、1949～1994年のトルコの2村落に関する Paul Stirling によるフィールド調査研究資料のアーカイブは、将来世代の研究者が利用できるようにすることが目的の一つであった。それでも、すべての資料がオンラインで閲覧可能というわけではなく、

申請があった資格を有する学者のみに利用を限定していた。また、被調査者の秘匿性を保つため、野帳に記載された全ての個人名は匿名化され公開されていた。また、1957～1995年のトルコの遊牧民 Aydinli に関する Ulla C. Johansen によるフィールド調査研究資料のアーカイブでは、公開されている写真群のキャプションの記述は充実しており、撮影年と撮影対象、緯度経度を含む撮影場所、そしてデータ形式が明記され、また被写体と系譜データとの対照も可能となっている。誰でも写真画像を見ることはできるが、低い解像度でかつ透かしスタンプが入ったデジタルファイルのみの限定公開であり、そのままでは無断転用できない。

これらのデジタルアーカイブの運営方法を参考にすれば、片倉もところフィールド調査資料のうち、文書資料（野帳、メモ手帳）、図面資料（地図）、音響資料（マイクロカセット、カセットテープ）、映像資料（ビデオテープ、8mmフィルム）のいずれも、オンラインですべてを閲覧可能にはせず、研究者に利用を限定すべきと考える。そして、画像資料（写真）については、写真の内容によって、公開の可否を決定するとともに、公表する場合でも低解像のデジタルファイルのみを公表するのが適切である。特に慎重に検討したいのは人物写真で、場合によっては写真の一部にぼかしを入れる等のデジタル処理を施した上で公開の道を探っていきたい。その際に原則となるルールは、写真の被写体であった村人もしくはその家族と新たな信頼関係を結ぶことにより、写真利用許諾に基づく公開条件が整っていることである。結果として写真の一部をデジタル加工したバージョンを公開する場合は、その理由についても丁寧に解説することが肝要である。なぜならば、写真利用許諾者ではない人が別の解釈や考え方を持つ場合も十分に想定されるからである。写真に付随する情報については、氏名や個人情報（場合によっては部族名）を除いて、一般公開する際には、概要についてはオープン・アクセスとしていきたい。他の資料とも相互参照できるような関連づけも充実させる必要がある。標本資料（生活用具）については個人情報等を除いて基本的にすべての情報を公開しつつ、収蔵品画像との対応、またその他の資料との関連づけを明確にする姿勢が求められる。いずれにしても、使用言語は日本語や英語のみならず、調査対象地の現地語アラビア語を含む多言語による記載を目指さなければならない。

そして将来的には、ワーディ・ファーティマ地域で再調査を行っている私たち調査グループのフィールド調査資料もあわせて、整理・保存・公開への道筋をつけていくことにより、「片倉もところ中東コレクション」の価値は一層高まると考える。片倉もところフィールド調査写真は学術的価値が高く、かつ現地の地域コミュニティによる評価も高い。それでも、調査対象地の社会状況は日々変化していく。民族誌的フィールド写真の価値を活かすためには、100年単位の未来に向けた長期的展望のもとに、人類の共有財産としてのデジタル写真アーカイブの運用が必須と考えられる。そのためには、国立民族学博物館と共創していく姿勢をこれからも持ち続け、最大限の協力を惜しまないと同時に、

現時点の担当者・関係者から未来世代にバトンタッチできる研究資源の管理体制を共に構築していくことを心がけていきたい。

以上、ワーディ・ファートイマ地域で半世紀前から収集されはじめたフィールド調査資料を活かして実施した再調査の研究成果としての第一歩を示し、先人が遺したフィールド調査資料を活用するための技術的また理論的諸課題を議論してきた。元の調査者の資料収集の考え方と姿勢に寄り添いつつ、調査チームによる調査地の再訪、そして同資料の再分析・二次の利用を推進することができ、研究成果の公開そしてアーカイブ登録にこぎつけることができたのは、ワーディ・ファートイマ地域の人々との新たな信頼関係の醸成であったことを、強調したい。

参考文献

〈日本語〉

梅棹忠夫

1969 『知的生産の技術』東京：岩波書店。

遠藤仁・Anas Mohammed Melih・渡邊三津子・藤本悠子・郡司みさお・黒田賢治・西尾哲夫・縄田浩志

印刷中「片倉もこのサウディ・アラビア収集品の同定に関する研究——銀製指輪の音を鳴らす機能とその役割」『沙漠研究』。

遠藤仁・郡司みさお

2019 「腕輪、足輪、指輪」縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』pp.106-107, 東京：河出書房新社。

遠藤仁／アナス・ムハンマド・メレー

2020 「指輪の構造と社会的機能」縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』pp.108-109, 東京：河出書房新社。

小田淑子

2002 「偶像」大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之編『岩波 イスラーム辞典』pp.326-327, 東京：岩波書店。

片倉もこの

1979 『アラビア・ノート——アラブの原像を求めて』東京：NHK 出版。

1984 「荒野に生きる女性たち」『季刊民族学』28: 6-23。

川喜田二郎

1967 『発想法』東京：中央公論社。

縄田浩志

2017 「移動戦略を沙漠の物質文化から探る」『民博通信』157: 18-19。

2018a 「コーヒー文化から、移動戦略を浮き彫りにする」『民博通信』161: 22-23。

2018b 「アラビア半島オアシス生活の半世紀——片倉もこの『アラブ社会』コレクション」『月刊みんぱく』42(8): 7-8。

2019a 「ワーディ・ファートイマの人びと——半世紀の変化をおって」『月刊みんぱく』43(6):

2-3。

2019b 「写し撮られた生活世界」 縄田浩志編『サウジアラビア，オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』 pp.36-37，東京：河出書房新社。

2019c 「アラビア半島のオアシスに生きる女性たちの50年——文化人類学者，片倉もところ現地調査資料から」『横浜ユーラシア文化館ニュース』 32: 4-5。

2020 「沙漠社会にみる適応と移動——アラビア半島の衣装と住居から考える」『民博通信Online』 2: 20-21。

縄田浩志編

2019 『サウジアラビア，オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』 東京：河出書房新社。

縄田浩志・遠藤仁・渡邊三津子・石山俊・藤本悠子／アナス・ムハンマド・メレー

2019 「写真の利用許諾をとる」 縄田浩志編『サウジアラビア，オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』 pp.38-39，東京：河出書房新社。

縄田浩志・片倉邦雄・藤本悠子・河田尚子・郡司みさお・古澤文・渡邊三津子・遠藤仁・石山俊

2021 「片倉もところによるサウディ・アラビア，ワーディ・ファーティマ地域を対象とするフィールド調査資料，特に写真資料の社会的特徴について」『片倉もところフィールド調査資料の研究』西尾哲夫・縄田浩志編（国立民族学博物館調査報告153） pp.31-61，大阪：国立民族学博物館。

縄田浩志・藤本悠子・河田尚子・片倉邦雄・郡司みさお・古澤文・渡邊三津子・遠藤仁・石山俊

2021 「片倉もところによるサウディ・アラビア，ワーディ・ファーティマ地域を対象とするフィールド調査資料の学術的特徴について」『片倉もところフィールド調査資料の研究』西尾哲夫・縄田浩志編（国立民族学博物館調査報告153） pp.1-30，大阪：国立民族学博物館。

縄田浩志・藤本悠子・河田尚子・古澤文・渡邊三津子・遠藤仁・片倉邦雄

印刷中「片倉もところフィールド調査資料の資料的特質と整理プロセス：民族誌的な質的データの二次利用のための方法論的かつ実践的な課題抽出として」『沙漠研究』。

日本写真家協会

2020 「写真著作権と肖像権」 <https://www.jps.gr.jp/rights-2/>（閲覧 2020年8月7日）

西尾哲夫

2019 「『ゆとろぎ』とは」 縄田浩志編『サウジアラビア，オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』 pp.46-47，東京：河出書房新社。

渡邊三津子・古澤文・遠藤仁・縄田浩志

2019 「片倉もこのフィールド資料を読み解く」 縄田浩志編『サウジアラビア，オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』 pp.32-33，東京：河出書房新社。

〈外国語〉

Corti, L. and P. Thompson

2004 Secondary Analysis of Archive Data. In C. Seale, G. Gobo, F. Gubrium, and D. Silverman (eds.) *Qualitative Research Practice*, pp.1-21. London: Sage Publications.

Johansen, U. C.

2015 Ulla Johansen Anatolian Ethnology Collection, Koç University, Suna Kıraç Library, Special

- Collections and Archives. <https://librarydigitalcollections.ku.edu.tr/en/collection/ulla-johansen-anatolian-ethnology-collection/> (accessed August 7, 2020)
- Johansen, U. C. and D. R. White
- 2002 Collaborative Long-term Ethnography and Longitudinal Social Analysis of a Nomadic Clan in Southeastern Turkey. In R. V. Kemper and A. P. Royce (eds.) *Chronicling Cultures: Long-Term Field Research in Anthropology*, pp.81–99. Walnut Creek, CA: A Division of Rowman & Littlefield Publishers.
- Katakura, M.
- 1977 *Bedouin Village, A Study of a Saudi Arabian People in Transition*. Tokyo: Unidversity of Tokyo Press.
- 1996 *Ahal al-Wādī*. Dār al-Qārī al-‘Arabī. (in Arabic)
- Kishigami, N.
- 2016 An Info-Forum Museum for Cultural Resources of the World: A New Development at the National Museum of Ethnology. In A. Ito (ed.) *Re-Collection and Sharing Traditional Knowledge, Memories, Information, and Images: Challenges and the Prospects on Creating Collaborative Catalog* (Senri Ethnological Reports 137), pp.25–33. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Mayer, A. C.
- 1960 *Cast and Kingship in Central India*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Nawata, H.
- 2019 Exploring 50 Years of Livelihood and Landscape Change in Wadi Fatima, Saudi Arabia: Ethnographic Collections of Motoko Katakura, a Japanese Female Anthropologist. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 49: 11–12.
- Sbriccoli, T.
- 2016 Between the Archive and the Village: The Lives of Photographs in Time and Space. *Visual Studies* 31(4): 295–309.
- Speelman, G.
- 2010 Islamic Tradition and the Prohibition of Images. In V. Kuster and G. Speelman (eds.) *Islam in the Netherlands. Between Religious Studies and Interreligious Dialogue*, pp. 135–148. Berlin: Berlin Lit.
- Stirling, P.
- 1965 *Turkish Village*. New York: John Wiley and Sons.
- Sulaimani, A.
- 2017 Gender Representation in EFL Textbooks in Saudi Arabia: A Fair Deal? *English Language Teaching* 10(6): 44–52.
- The Center for Social Anthropology and Computing, University of Kent at Canterbury
- 2020 Forty-five Years in Turkish Villages 1949–1994: Paul Stirling’s Ethnographic Date Archives. http://era.anthropology.ac.uk/Era_Resources/Era/Stirling/index.html (accessed August 7, 2020)
- Zeitlyn, D.
- 2000 Archiving Anthropology. *Forum: Qualitative Social Research* 1(3): Art. 17.